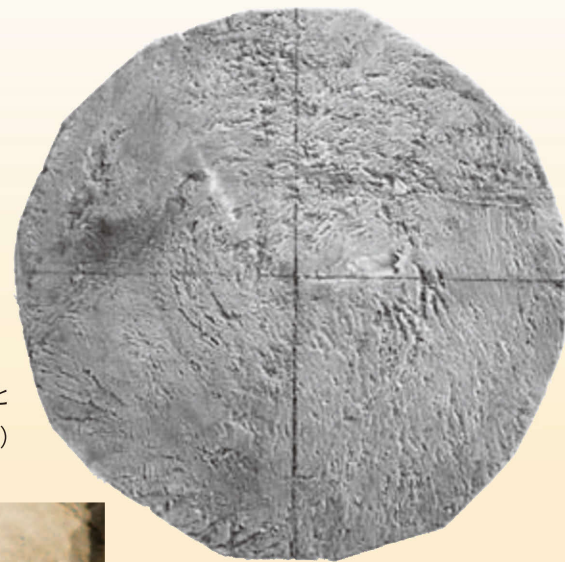


法華寺旧境内出土の柱根と礎板

昨年と今年の春におこなわれた法華寺旧境内の調査では、数多くの柱根や礎板が出土しました(写真右頁)。出土した部材は、酸素や紫外線が遮断された地中でよく保存され、柱根は大きいもので直径約40cm、長さ約130cmにおよびます。その柱根の下方には手斧による丁寧な加工痕が観察でき(写真左頁上)、底面には加工時の墨付けがみられます(同下)。よく見ると、十字線の左端と加工位置が微妙にずれています。礎板には厚みが薄いものと厚いものがありますが、ほぞ穴が見られるものもあり、何らかの部材を転用したものと考えられます。

(都城発掘調査部 芝 康次郎)



柱根にのこされた加工痕跡(上)と加工時の墨付(右の赤外線写真)



今年の調査で見つかった掘立柱。
約130cm分が残存していた。

